

美術科

1 美術科の研究主題

豊かな表現力を導き出す指導法の工夫

- (1) 知識技能の確かな定着を図り、活用し豊かな表現力へと結び付ける。
- (2) 鑑賞活動を充実させることで、読解力の育成を目指す。

2 研究の概要

(1) 主題設定のねらい

美術という教科の立場から「思考力、判断力、表現力、読解力」をとらえ、それを「自らの思いやイメージを造形作品として形や色に置き換え他の者に伝え、訴えるために必要なすべての力」とした。それらの力の育成のためには、基礎的な知識、技法を確実に習得させること。それを利用し自分の力で工夫を加え創造の幅を広げていくことのできる単元、教材を生徒に与えること。創造の過程で自らがじっくりと考えたり見つめ観察したりする時間、振り返る時間や先を見通す時間を生徒に与えることなどが必要であると考え。

また新学習指導要領では、鑑賞指導の内容やそれに伴う言語活動の充実を求められている。さらに従来の表現、鑑賞という領域に加え、「共通事項」が新設された。

以上のことを踏まえ、どの学年も共通して個々の技能面での個人差が非常に大きい状況の中でいかにして、個に応じた幅広い指導を行い、豊かな表現力、読解力、判断力、思考力の育成に関わっていけるかを探るために、この研究主題を設定した。

(2) 概要

① 知識、技能の定着と活用する力を養う。

学習指導要領の改訂により、新たに設定された「共通事項」にある指導内容が、美術における基礎基本ととらえることができる。それは色や形、光、材料などに関する知識や理解でありすべての表現、鑑賞活動の土台として小学校の図画工作から連続して養われていくべきものである。研究主題である基礎基本の定着をこの共通事項の計画的な指導により図りたい。

② 鑑賞指導の工夫を図る。

新学習指導要領のもう一つの大きな改善点に、鑑賞活動の重視がある。

「我が国の美術についての学習を重視し美術文化に関する学習の充実が図られるようにすること。また自分なりの意味や価値を作り出していく学習を重視し、第1学年に作品などに対する思いや考えを説明し合う学習を取り入れ、3年間で説明し合ったり批評し合ったりするなどの言語活動の充実が図られるようにする。」とある。これを踏まえ鑑賞指導の工夫を図ることで、読解力、表現力、思考力の育成を目指したい。

③ 生徒の実態に合わせた表現活動の充実を図る。

美術の表現活動は、視覚化されたものを生み出す活動である。その制作活動の始まりから作品としての完成、その後の鑑賞に至るまでの中のさまざまな段階で、表現力、読解力、判断力、思考力を駆使する場面があり最終的にそれらが作品という形になって表現される。生徒の個々の実態に合った指導法を工夫することで、それらの力を発揮でき充実した創作活動ができることを目指したい。

④ 評価の工夫

創作活動の中でいかに知識や技能を習得したか、それを生かしアイデアや構想を練ったか、どのような材料や技法を使うかを判断したか。自分の思い・感情・意図を作品に置き換えることができているか、計画的に仕事を進められたか、など作品自体の質、優秀さ、出来、不出来を評価するのではなく、制作の過程を細かく、どのような視点で評価するのかが非常に重要となる。評価のポイント、観点をその都度、生徒に明確に提示し、それを目標として、生徒が努力できるような評価を行うように工夫する。

3 19、20年度の取り組みからの考察、課題

- (1) 学年によりクラスの生徒数に差があり、個別指導に充てる時間の格差が大きかった。美術は少人数で取り組むと効果は大きいと考える。
- (2) 工芸作品のように技能の習得が大切な教材では各自が自分の技能レベルに応じた達成目標を立て見通しをもってよく取り組むことができた。
- (3) 各単元、各授業時間毎に、研究主題を踏まえた課題や目標を設定することで、4つの観点に関してより細かい採点、評価へと結び付けることができた。
- (4) より魅力的で応用範囲の広い教材を工夫する必要がある。
- (5) スパンの指導計画と実際の指導時間にかなりのズレが生じてしまった。鑑賞指導を丁寧に行っているとどうしても時間がかかってしまう。制作する作品の数は少なくなってしまうが、密度の濃いていねいな指導を試みたい。

4 21年度の取り組み

- (1) 授業毎に、その授業での達成目標や課題を必ず提示し各自のレベルに合わせて取り組ませる。目標や課題は基礎レベルのもの、応用発展させたものを示し、選択できるようにする。
- (2) 基礎コースに該当する生徒への個別指導の時間を多くとるようにする。
- (3) 言葉から形や色のイメージを引き出したり、逆に形や色を言葉で表現したりと、言語表現と造形作品とのかかわり合いを密にし鑑賞活動の充実を図る。
- (4) 鑑賞と表現が密接に結びつき互いに影響し合い、表現力や読解力が高められるような題材の工夫をする。
- (5) 他人や自分の作品をよく観察しその特徴や、良い部分を見付け文章で表現したり、意見を述べあったりできるようにする。

5 具体的な実践例

- (1) 題材名 「水墨画で自画像を描く」 第3学年

- (2) 題材設定の理由

中学3年生は身体的にも精神的にも成長し大人へと近づく年齢である。進路選択に向かって理想や希望と現実をつき合わせるようになってきたり、自分自身がどんな人間であるのか考えたり、3年間の自分の歩みはどうであったのかを振り返ったりと、自分を客観的に観たり分析したりする機会が多くある。そのような15歳の姿を昨年度は筆ペンを使い、絵巻物風の自伝物語として描くことを試みた。この題材の成果と反省をもとに、今年度は水墨画という日本の伝統美術の魅力を学ぶとともに、自分自身の自画像を水墨画として描いてみることにした。

- (3) 指導のねらい

- ① 日本美術の大和絵や水墨画が現代のデザインやアニメーションなどにも大きな影響を与えていることや日本美術に見られる大胆な色や形を知ること、日本美術に対して新たな視点で興

味をもたせる。作品を鑑賞し観察し、分析することを通して読解力、思考力を養う。

- ② 筆と墨という普段はあまり使用しなくなってしまった道具を画材として使うことで、新鮮さを味わわせる。慣れない道具を使うことで、工夫を凝らしたり思いがけない表現に出会ったりすることの楽しさを知ることができ、表現力の幅も広がる。
- ③ 自分自身をテーマとし自画像を描くことで自己を見つめる機会とさせる。言葉で表現した自分のイメージを視覚化し絵画というものに置き換える作業をすることで読解力、表現力を養う。
- ④ 完成作品を皆で鑑賞しあうことで、自分自身をアピールさせるとともに、他人に対する理解や共感、新たな一面の発見など相互理解を深める機会を作る。

(4) 題材の評価基準

① 美術への関心・意欲・態度

ア 自分の内面的なテーマを見いだすために意欲的に制作に取り組むことができる。

イ 自分らしさを表すために独自の表現を工夫しようとすることができる。

② 発想や構想の能力

ア 自分の個性や主張を最もよく引き出し、色や形を通して、生き生きと表現することができる。

③ 創造的な技能

ア 墨と筆による表現技法を理解し習得することで、それを取り入れ、個性豊かに自画像を描くことができる。

④ 鑑賞の能力

ア 絵巻物、水墨画、障壁画、屏風絵などの日本美術に興味をもち、さらにその創造精神やアイデアが現代のさまざまな分野の芸術に受け継がれていることを理解する。その時代に生きた人々の心情に絵を通して触れる。

イ いろいろな作品のよさや楽しさを理解し、どのような工夫で自分自身の姿や内面を伝えようとしたのかを味わい感じることができる。

ウ 自分の作品についての制作意図や主題について説明したり、友達の作品についての洞察、感想を述べることができる。

(5) 学習指導計画 10時間

- ① 平安～江戸時代の代表的な日本美術を鑑賞し学ぶ。(1時間)
- ② 水墨画の作品を模写することで筆や墨に慣れる。(1時間)
- ③ 水墨画の技法について理解し、練習する。(1時間)
- ④ 絵のテーマ、構成する要素を考え、さまざまなスケッチを積み重ねながら、構想を練り下描きをする。(2時間)
- ⑤ 効果的な表現方法を工夫し取り入れて、水墨画による自画像を制作する。(4時間)
- ⑥ 完成した作品を互いに鑑賞し作者の思いや工夫を感じ取ったり、自分の作品についての制作意図や感想を述べたりする。(1時間)

(6) 学習の展開例 (10時間中の第4, 5時間目)

	学習活動	研究主題との関連	評価
導入	前回までのワークシートや資料と、本描き用の画仙紙を配る。 前回までの作業の内容を復習する。	制作に必要な、基礎基本となる知識や技術が定着しているか。	前回までの作業を遅れることなく終了しているか。 (意欲、関心、態度) 知識、技術、技法が身に付いているか。 (創造的な技能)
展開	本時の作業内容を聞く。 *画面構成を考え自分の絵を組み立てる。 *どんな自分を表現したいのかを考える。 ・どのような表情の顔か、顔の向きか。 ・どんな手のポーズか。 ・背景の風景は何か。 ・画面の配置の仕方は。 *画仙紙に鉛筆で自画像から描き始める。 *自画像との関係を考えながら、背景を描き進める。 *鉛筆描きが終わったら、墨と筆で線描を始める。 ・線の表情を考え、工夫して描いていく。 細い線、太い線、かすれた線、にじんだ線、点描、濃い線、薄い線など。	積み重ねてきた作業を組み合わせ、自分の作品としてまとめる。 (表現力、思考力、判断力) 自分の主張、自分をイメージする言葉を絵に転換できたか。 (表現力、読解力)	進んで作業に取り組む。 (意欲、関心、態度) 鏡を見てよく観察し、個性的な表情を描くことができる。伸び伸びとした表情豊かな線を描くことができる。アイデアにあふれた背景画を描くことができる。 (発想や構想の能力、創造的な技能)
まとめ	*線描が終わった作品を少し離れた場所から眺め、全体の印象をとらえてみる。 *次回の色つけについての予告を聞く。	描いた線描の絵を見て作業を振り返り、考えを述べることができる。 (読解力、思考力)	作業の終わりに、自分の作品を鑑賞し顧みることができる。 (鑑賞の能力)

(7) 成果と課題

- ① 鳥獣人物戯画、雪舟の秋冬山水図、長谷川等伯の松林図屏風、俵屋宗達の風神、雷神図さらに現代の宮崎駿アニメまで誰もが知っている作品を鑑賞することで親しみやすく、興味をもって学ぶことができ、水墨画の知識や技法の定着が非常にスムーズであった。
- ② 自分自身を描くということで、他のものを描くよりは観察が鋭く、ていねいな作業を行うことができた。
- ③ 自分や友達顔を鑑賞するという事で、素直な感想や意見を多く述べる事ができた。

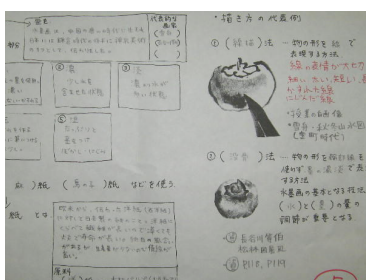
6 実践例に関する資料

- (1) 個性的なさまざまな画家たちの水墨画作品を鑑賞し感想や意見を述べる。

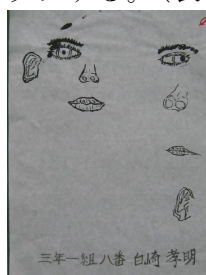
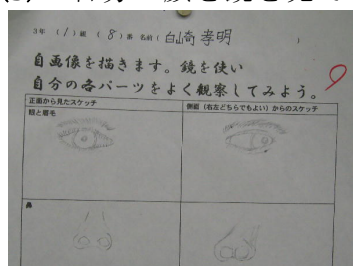
(読解力、思考力)



- (2) 水墨画に関する知識や技法についてワークシートを用いてまとめる。その後、作品を模写することで基本的な技法についての練習、習得を試みる。墨と筆という道具に慣れ親しむ。
- (基礎・基本の定着、思考力、表現力)



- (3) 自分の顔を鏡を見てスケッチする。(表現力、読解力)



- (4) 練習をもとに自分の顔の全体像をスケッチする。

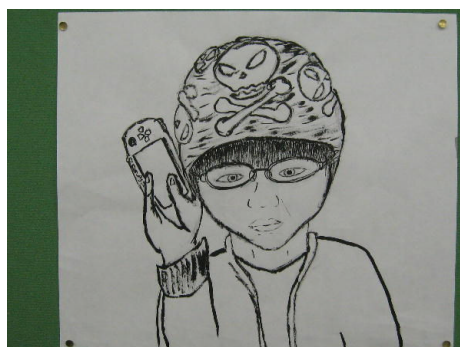


- (5) 手の表情を観察しスケッチする (読解力、表現力、思考力)



- (6) 今までのスケッチをまとめ、自画像のポーズを決め、大きな紙に本描きする。

(判断力、表現力、読解力)



7 研究のまとめと来年度への課題

- (1) 研究主題を意識することで、授業の中で考えさせる機会や、工夫させる機会を増やすことができた。美術の作品制作において完成した作品は授業の結晶として重要なものである。作品の出来映えそのもの自体を評価することも大切であるが、そのみでは、そこに至った過程をも評価することはできない。何を目的として、どういうことを、どのような手順で考えさせたのか、そのために必要な知識、技術をどれだけ習得できたのか、細かい制作の過程で、きちんと観点を定めて評価していく必要がこれまで以上に重要である。評価のバランスを慎重に考慮せねばならない。
- (2) 表現力や読解力が大きく育成されればされるほど、美術では、指導する側の意図したことの範囲内に収まらないさまざまな生徒側の答え（作品という形での）が出てくるであろう。そのような結果を受け止め、さらに新たな課題として生徒に投げ返すことができるような指導ができれば、理想の指導法かと考える。一方的に、何か目新しいことをさせたり、教員側だけの価値観で固まった枠の中で生徒を見ていたのでは、柔軟な表現力や思考力、読解力を育成することはできない。
- (3) どの力も育成には時間がかかる。じっくりと向き合うには時間的なゆとりや心のゆとりも必要である。しかし現実には美術の授業時間は年間35時間である。文化祭や展覧会などで作品を展示することも大切である。厳しい時間制約の中で指導の過程を最大限効果的にするような指導方法が求められている。

あと1年間の研究期間では、本当に研究を深めるとともに、さらに的をしぼり組みたい。